

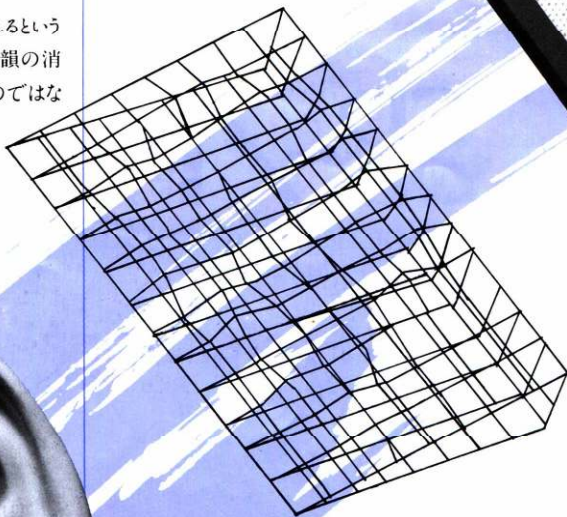
音楽を聴くためのヘッドフォンであるなら、人間の耳にやさしく寄りそうカタチが望ましいのではないだろうか。

・音楽を聴く素晴らしいは、名曲や名演奏に触れるということだけでなく、音の繊細な色合い、雰囲気や余韻の消え方といった微妙なニュアンスを楽しむことにあるのではないだろうか。

STAXが世界で最初にコンデンサー型ヘッドフォンを実用化し、独自の音の世界を創り出したのは、1959年それをSR-1として製品化したのは1960年のことでした。

そして今日までの四半世紀もの間、常に音楽を聴くための理想的なヘッドフォンを模索しつづけ、数々の傑作と称される製品を生み出してきました。音の分解能・高解像力という点では頂点を極めたといえるSR-X/MK-3。そしてエポックメイキングな製品として忘れることのできない、SR-ΣとSR-Aの登場でした。

・音楽を聴き、楽しむのが、私たちの両耳である以上、あるがままの耳の形を大切に、自然に対応しながら音を送り込む。音や音楽が、ふだん聴いているそのままに耳に入ってくるヘッドフォン。これこそ、人間とヘッドフォンのヒューマンでナチュラルな在り方ではないだろうか…。
 こうして私たちは、原点に立ち戻り、人間の耳を新たな研究対象として模索を始めたのです。まず、スピーカーユニットの形態を変えてみました。耳の全面積をカバーできるように大型化し、さらに貝殻のような長円形の外耳のカタチに合わせて、小判型にしたのです。そして試聴。振動膜の運動形態の観察や、張力の違いによる音の違い、耳までの距離や角度による違いなど、ひとつひとつ試作を繰り返し、分析を重ねました。このとき、私たちはコンデンサー方式を採用していることの恩恵を、思いがけずを受けたのです。もし発音ユニットの形や大きさが自由に換えられるコンデンサー方式でなかったら、試行錯誤による試作につぐ試作に、スムーズに対応できなかったと思えるからです。



…こうして4年の歳月の後、まったく新しい小判型ユニットによる第1作、SR-Σが誕生しました。音像を前方に定位させるために、この大型ユニットを耳の前方に位置させ、独特の“虫籠”構造により、自然な音場感と画期的な音のスケール感を与えました。そして単なる信号変換機としての音から、音楽のテイストを楽しむ音へ至ったと、内外のオーディオファイルから高い評価が寄せられました。SR-Σはヘッドフォンの世界に独自の新しい頂点を築いたわけですが、あのSR-X/MK-3を頂点とする、極限ともいえる高解像力と分解能を忘れることができない、という声もまた、少なからず存在したのです。SR-ΣとSR-X/MK-3の特長を併せ持つ、もうひとつの頂点…。これこそ、SR-Σの発表後さきわめて短い間隔で発表された、SR-Aにはかならないのです。なぜ、短期間で新しいSR-Aが開発できたのでしょうか。実は、STAX技術スタッフの中で、Σの開発中にもうひとつの非公認プロジェクトが実験試作を繰り返していたのです。このノウハウをもとに、公認された新プロジェクトが数々の試作と試聴を繰り返しました。こうして決定された



SR-Aのデザインは、小判型発音ユニットを耳の向きに合わせて、やや斜め前方から音が入るように設置する。密閉感を取り除くために、ボテテを独特の構造をもつオープン型とする。さらに軽い装着感を与え長時間のヒアリングにも疲れないよう、イヤークッションにも、きめ細かな配慮を加える。というものでした。これらによって、音楽に壮大なスケール感を与え、極めて高い解像力をも可能にしたのです。第3の頂点、SR-Aの見事な成功です。

人間の耳のカタチに対して、素直に対応することで、最も音楽的で、最もナチュラルなイヤースピーカー＝SR-Aが完成したので。1981年、シカゴのコンシューマーエレクトロニクスショーは、SR-Aに対して“デザイン・アンド・エンジニアリング賞”を与え、その成果を高く評価しました。そして、その後、ダイムラー・ベンツ社の目にとまることになります。彼等は、すぐれたヘッドフォンであるSR-Aの、特に“アナリスト 謹厳な分析者”である部分に、強く興味を抱きました。

やさしく、力強く、そして

あくまでもアキュレイト。

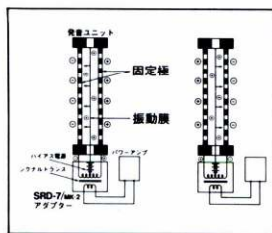


SR-A
Lambda
 ¥28,000

羽のように軽い振動板…

コンデンサー型のイヤースピーカーが、なぜこれほど多くの支持を受けているかと言えば、まず“振動体が軽い”ということです。音楽の微妙なニュアンスを伝えるには、振動体に可能な限り軽いものを使い、忠実に電気信号に変換させることが必要です。振動体が重いほど不利な事はいうまでもありません。優秀録音のほとんどがコンデンサー型マイクを使用しているという事実も、このことを裏付けています。コンデンサーマイクで録った音楽を、コンデンサースピーカーで再生する。これがスタックスの発想の原点であり、コンデンサー型のシステムをお薦めする最大の理由なのです。

そして、独自の構造が音楽の感動を呼び起こします。では、コンデンサー型スピーカーの基本構造について



て少し触れてみましょう。厚さわずか数ミクロン(1ミクロン=1/1000mm)という極めて薄い高分子フィルム(振動体)を用意しこれにバイアス電圧(イヤースピーカーの場合200V~600V)を加えます。その両側に電極を置き、そこへ片側が+もう一方が-となる様に電圧で音楽信号を加えると、その電位差によ

り、フィルムが電極に引き寄せられたり反発しあつたりして発音するわけです。また、ダイナミック型のようにマグネットを使わず静電気力で動作させるので、原理的に磁気歪みが発生しません。その結果、微細な音の再現性に優れ、微妙なニュアンスを見事に表現します。さらに、歪が極めて少ないので、長時間にわたる観賞も快適にしてくれます。音楽が生みだす壮大な広がり、楽器の奏でる繊細な音色、そして演奏家の細やかな息づかいまでも鮮やかに蘇えらせ、新たな感動を呼び起こします。スタックスのコンデンサー型イヤースピーカーシステム。音にこだわる方へ、自信をもってお薦めします。

